No.1 Sep 1978

Tatsunoko FAN CLUB NEWS

竜の子ファンクラブニュース

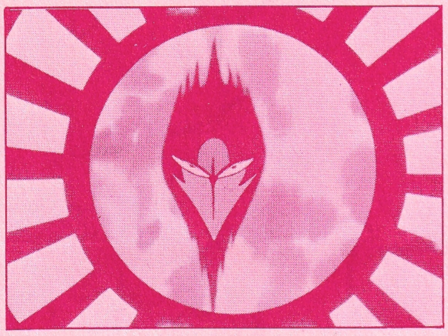
愛する仲間ジョーへ

おまえは、熱い心と哀しみを抱き
さながらそれを焼きつくす
火の鳥のごとく翔ぶ
果てしなく続く戦いの雲間で
死してはじめて
そのつばさをやすめるのだ

パートII 企画意図

前作「科学忍者隊ガッチャマン」では科学忍者隊と総裁X、その下僕のベルク・カッツエとの血み泥の闘いを描いた。そこには何があったか。憎み合う者の肉弾戦、兵器に利用された科学、残された者の悲しみ。いやそれだけではなかった。その裏には青春を駆け抜けた五人の若者のドラマがあった。何故闘うのか。正義の名のもとの鉄拳なら許されるのか。焼きつくされた街はどうなるのか。人間の生き様、人間が生きている地球とは何か——今回パートIIではこれらをもっと深く広く掘り下げて描いていく。

総裁Xの逆襲

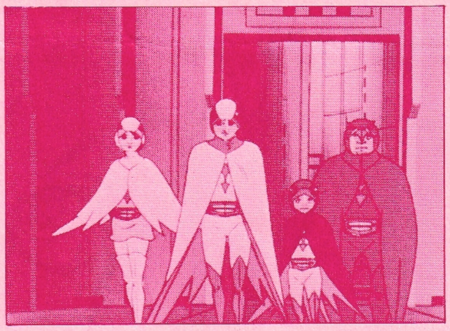


科学忍者隊が飛び込んで行く新たな闘いの渦。それは総裁Xの逆襲である。前作、総裁Xの地球征服の野望、ブラックホール作戦は、科学忍者隊の必死の闘いにより挫折した。敗者となったXは故郷セレクト星に帰っていったが、セレクト星は完全に消滅してしまっていたのである。宇宙の戦士として地球に飛来したXには、帰る星はなかった。Xの心は煮えくり返っていた。長い年月をかけてベルク・カッツエを創りあげギャラクターを組識し地球を粉々にするつもりが、全て水の泡となってしまったのだ。もはやXに残っているものは、狂気にまで似た復讐だけであった。Xの全身全霊は逆襲という形になって地球と科学忍者隊に注がれたのである。

Xは絶大な力を蓄え地球に再来した。地球を今度こそ火の海とするために。Xはギャラクターを組識し地球支配者となる人間、ゲル・サドラを創りあげた。生まれながらに異常な染色体を持った赤ん坊がXにより放射能を浴びせられ急激に成長した半陰半陽人間。我に背く者は生かしておけぬという、名前通り恐ろしくサドイズムに秀でた人間。Xに地球征服の命を受けると最も目ざわりな反逆者、科学忍者隊を倒し地球を征服せんと作戦を立てる。

健たちは今………

一方健たちはどうしているか。科学忍者隊は不滅であった。総裁Xがあのままひっこむはずがない。いつか地球に来るであろう。このことをうすうす予期していた南部博士は健・ジュン・甚平・竜を再結し、Xの魔の手から地球を守る準備をしていた。だが、四人の胸に去来するのは、今は亡きジョーの悲しい追憶だった。きびしい訓練のなかでジョーを思い出すことが何度あったろうか。ジョーは科学忍者隊の心に鮮明に存在しているのだ。だがそのジョーはぬくもりをもっていなかった。ポンと肩をたたかれることも拳を顎にくらうこともないのだ。



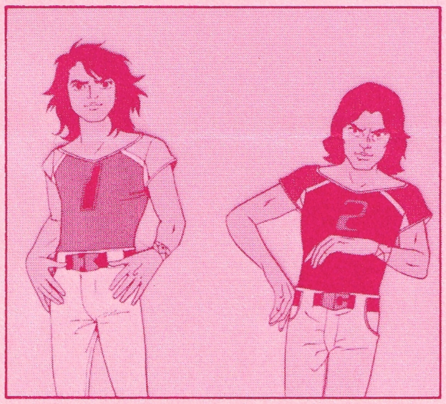
ジョーは戻って来るか!?

果してジョーは死んでしまったのか。あの激しい闘志をむき出しにしたジョーは二度と戻らぬのか。

「俺はな、両親を殺した野郎に復讐するために闘っているのさ」

最初はその言葉通りだったかもしれないが、ジョーはジョーなりに無器用に地球を愛し、愛するものを守るために闘ったのだ。地球はジョーの満身の力をこめて投げた羽根手裏剣によって危機一髪、救われたのである。しかし、ジョーは死という大きな代償を被らなければならなかった。“G２”というイニシャルはもう見ることはない。いや帰って来ないは

ずがない。Ｘがやって来るのだ。両親を殺し自分の身体もボロボロにし、健たちの前から去ることを余儀なくしたＸを放っておくわけがない。死しても地の底から土をかきわけはいずってでも挑んでいくであろう。それでこそジョーなのだ。



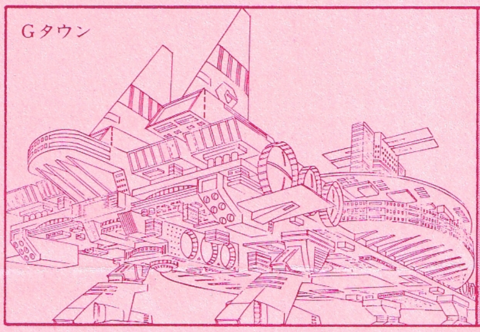
ジョーは死の淵から舞い戻る。立ち上がる戦士——それは生身でない人工の体、サイボーグとなったジョーであった。ジョーはサイボーグとなってしまったがその運命を呪いはしない。再び生きてギャラクターと闘える喜びさえ感じているのだ。まさしく火の鳥のごとく甦ったのである。だが健たちの前でジョーは自分がサイボーグであることを知られるのを拒むであろう。同じ仲間として闘いたい。それを何よりも望んでいるのだから。

新たな闘いが始まる。逆襲に狂い今や怒りが絶頂に達している総裁Ｘ、たくさんの犠牲をはらい、それでも尚且つ地球を守ろうとする科学忍者隊、サイボーグとなって今度こそＸを叩き伏せようと復讐心を抱くジョー。それに加え、巨大で強力で多様なメカニックが登場し、以前にもまして想絶なアクションがくりひろげられる。それぞれの心模様、人間ドラマがからみ悲惨な闘いが始まるのである。白い、白い、科学忍者隊のまっ白い羽根手裏剣が血に染まるかもしれない。

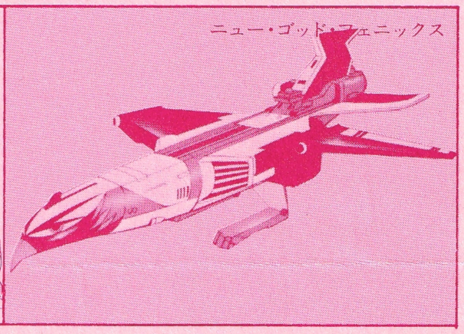
これがガッチャマン・メカだ！

南部博士は前作で三日月基地を破壊されたが、それにかわる大型潜水空母“Ｇタウン”を建造した。このＧタウンは海上走行、海底潜航、各メカの発着、格納ができ全てコンピューターによる自動システムが行われている。科学忍者隊の本部である。

またＧタウンの誕生と共に“ニュー・ゴッドフェニックス”が造られる。科学力の随をつくし、ゴッドフェニックスより数段性能がよくなっている。Ｇ１号からＧ５号までのメカを格納し、大型ロケットエンジン二基搭載、最高速度マッハ八・五、航続距離一万八千キロである。火の鳥もパワーアップされ、科学忍者隊の戦法はより幅広くなるであろう。



Ｇタウン



ニュー・ゴッド・フェニックス

ガッチャマン・スタッフ

原作・企画／竜の子プロ企画室
総監督／笹川ひろし
脚本／鳥海尽三・陶山智・山本優・酒井あきよし・久保田圭司
演出／原征太郎・西久保瑞穂・真下耕一・押井守
作画監督／宮本貞雄
動画チーフ／加藤和恵
美術設定／中村光毅
背景／スタジオ・ビック
音楽／すぎやまこういち
特殊効果／朝沼清良
キャラクターデザイン／天野嘉孝
メカニックデザイン／大河原邦男
撮影／平山昭夫
編集／谷口肇
録音／水本完（新坂スタジオ）
効果／アニメサウンド
プロデューサー／九里一平・中野正則

声の出演

大鷲の健／森功至
コンドルのジョー／ささきいさお
白鳥のジュン／杉山佳寿子
つばくろの甚平／塩屋翼
みみずくの竜／兼本新吾
南部博士／大平透
総裁Ｘ／田中信夫
ゲルサドラ／池田勝

制作スケジュール

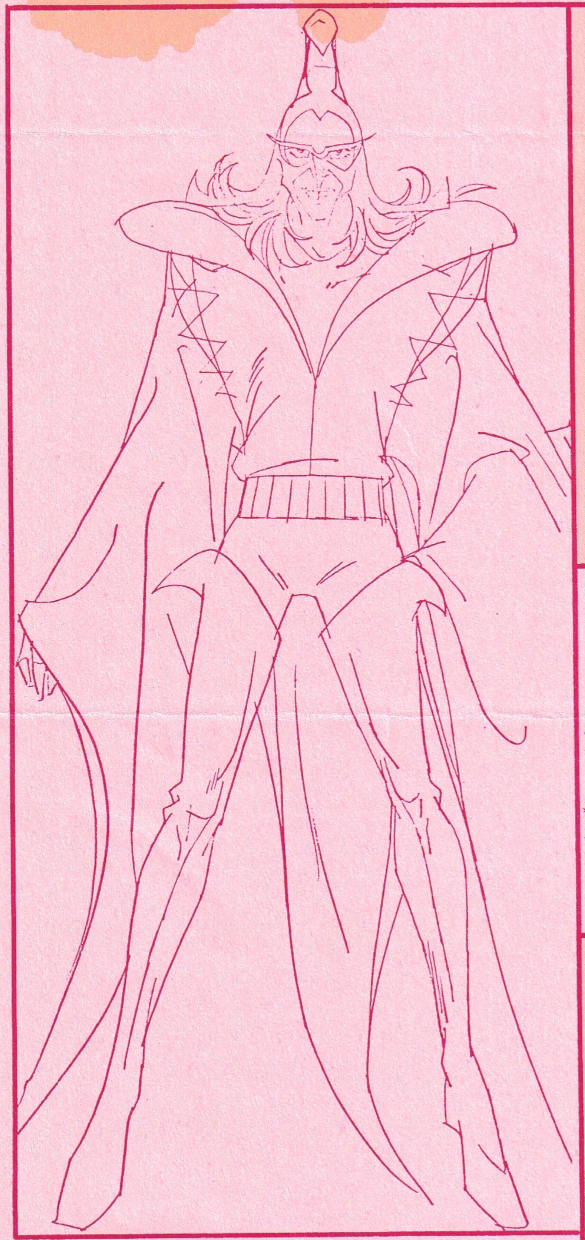
放映No.	制作No.	仮タイトル	脚本	絵コンテ	演出	放映
1	1	総裁Ｘの逆襲	鳥海　尽三	笹川ひろし	原　征太郎	10/1
2	2	謎の羽根手裏剣	鳥海　尽三	笹川ひろし	西久保端穂	8
3	3	地獄の黒騎士団	久保田圭司	真下　耕一	東京アニメ	15
4	4	還って来たジョー	陶山　智	真下　耕一	アドコスモ	22
5	7	謎の原人大襲来	山本　優	西久保端穂	西久保端穂	29
6	6	衝撃のピラミッド	山本　優	押井　守	押井　守	11/5

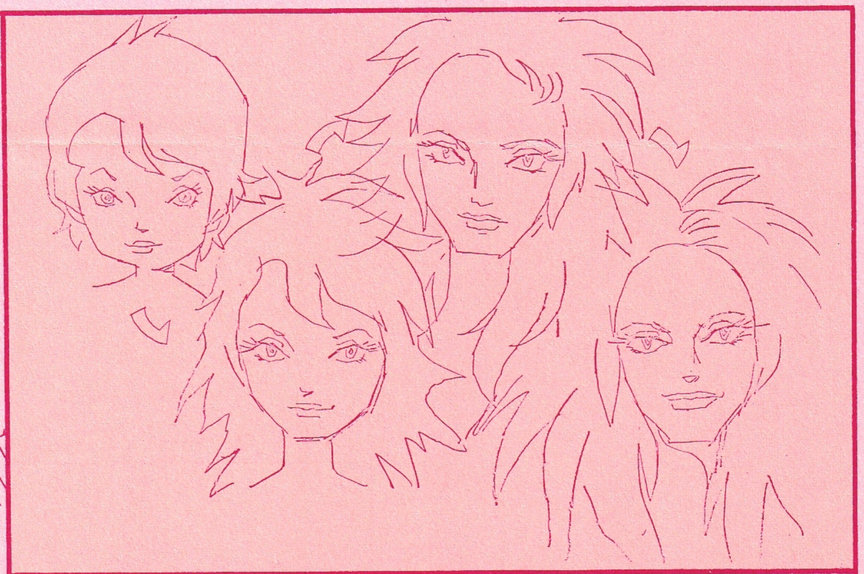
パートIIは前作の総監督鳥海永行氏にかわり、キャシャーン、テッカマン、ヤッターマンを創られた笹川ひろし氏が総監督になります。それに伴い優秀なスタッフが集い、新しいガッチャマン班が形成されました。

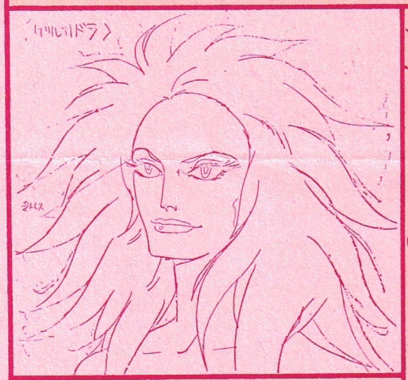
こう創りたい—笹川ひろし

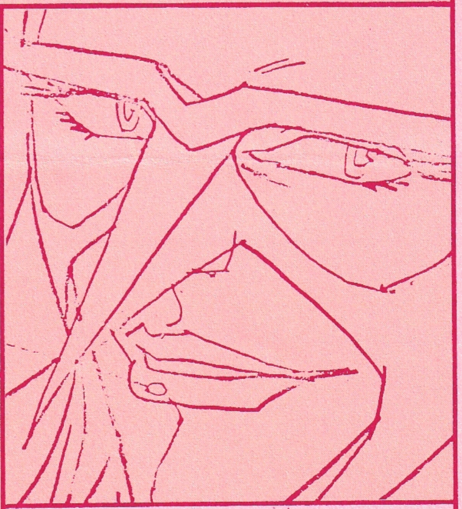
今回パートIIは更に一歩踏み出し、新鮮な魅力を表現したいと思います。キャラクターは同じだけど、そこから視野を拡くしていくつもりです。場面を宇宙全体へ——宇宙という大自然対ちっぽけな地球人の、それでも懸命に生きている若者、科学忍者隊との闘いを通して、自分なりのもの（それは一ばん鳥海氏が望んでいるし）を生み出したい。
スタッフにも恵まれたし、面白くなりますよ。

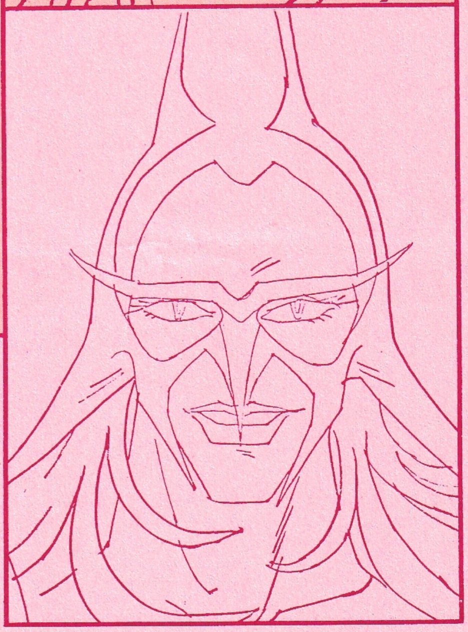
新しい悪　ゲル・サドラ











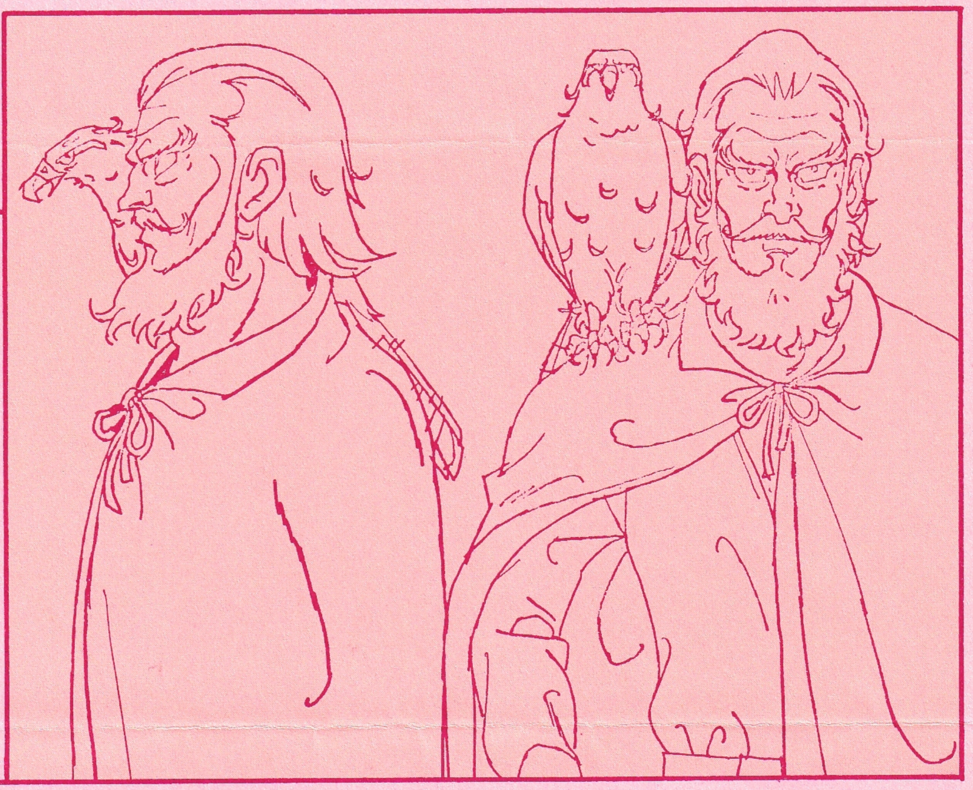
ゲル・サドラ（25才）

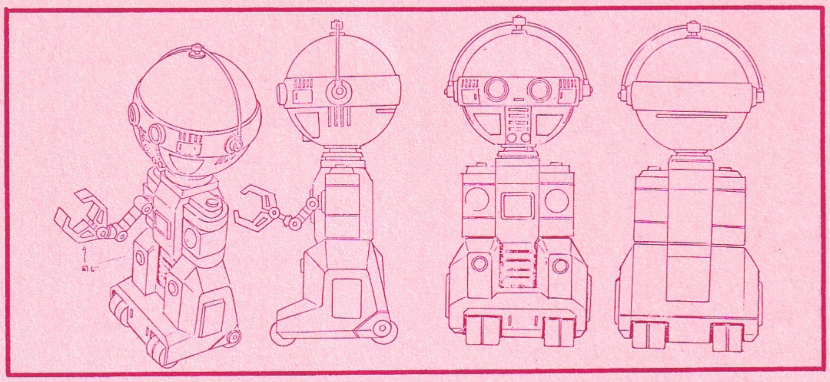
ベルク・カッツェを失った総裁Xは、一人の赤ん坊を急激に成長させて、ミュータント化し特殊人間を造り出した。それが彼？　である。ゲル・サドラは総裁Xの忠実な部下となり、地上を掌握しようとする。

女ではなくベルク・カッツェと同じ半陰半陽のミュータントの一種で、男と女の性格と行動を使い分ける。

Dr.ラッフェル

ドクター・ラッフェル（45才）
学者独特のエゴを剥出しにしたような天文学者である。彼は人間魚雷として、ジョーをサイボーグ化し、総裁Xにたちむかう。

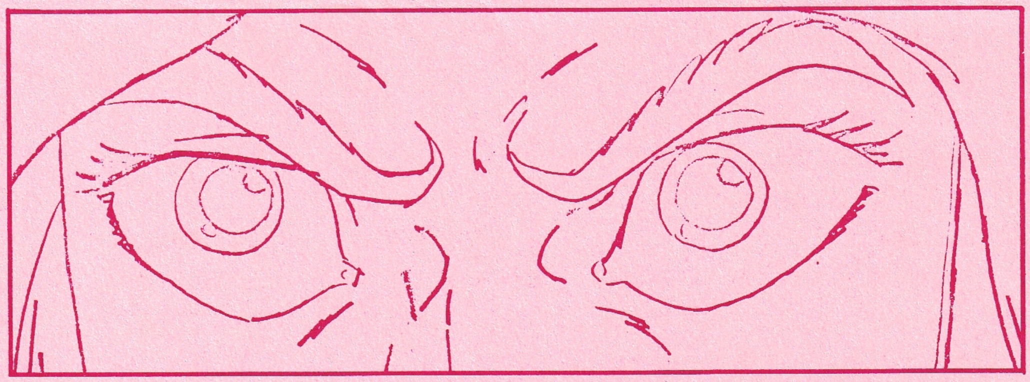




パイマー

ニューゴッドフェニックスを操縦するロボット。

ジョー



特別寄稿

コンドルの羽根

又は、ガッチャマンの世界

松澤　睦実

「だれだ！　だれだ！　だれだ！」とは、子門真人の絶唱で知られる「ガッチャマン」の主題歌でありますが、これがスローテンポで流されたのを、聞いたことがありますか？

それが時に、すすりなきのように聞える事に、一瞬ギョッとされることでしょう。

最近「ヤマト」と「ガッチャマン」という、きわめてすぐれた二本のアニメを、毎日つづけて見るというチャンスに恵まれ、私はテレビの前ですっかり考えこんでしまいました。

それは、ガッチャマンの世界の、やりきれない程の暗さです。シリアスなことで有名な「ヤマト」と比べてさえ、それは、はっきりと感知することができるのです。

確かに、ヤマトにおいては、死んだと思われた古代守や、雪が次々に生きかえりますし「ガッチャマン」では、レッドインパルスもジョーも、果ては英雄的な宇宙飛行士さえ、味方の手で殺されます。

しかし、それだけではガッチャマンの暗さを説明することはできません。ガッチャマンの世界の暗さを解く鍵は、もっと深いところに求められるべきでしょう。

云うなれば、「ガッチャマン」と「ヤマト」とは、空気から何からまったく異った世界なのです。

「ヤマト」において、地球は絶滅寸前であり、ヤマトの航行は、あのテーマ曲が暗示するごとく、宇宙の永遠の時間と競合し、困難にたちむかう英雄的悲壮感をおぼえます。そして、その世界は、理性的で清澄なかなしみに満ちています。

ガミラス軍との戦いが、いかに苛酷であろうと、それがそれぞれの星の命運をかけたものであるという、前提をそれることはありません。だから、我々には敵方のドメル将軍以下の行動に、理解と敬意をもつことさえできるのです。

それから眼を転じて、「ガッチャマン」の世界を見ると、それは何と混乱と不条理に満ちていることでしょう。

ガッチャマンの世界の地球を、破滅させようとする総裁Xは、不条理な悪の神そのものです。何処ともなく飛来し、絶大なる力で人々の間に悪を育て、そして己れの事情のままに去っていきます。

人間達は、ベルクカッツエをふくめて、ただ、それに翻弄されるだけ、人々の地球を守ろうとする戦いは、あるいは最初から虚しいのかもしれないのです。

「ヤマト」には、幾分、古代進以下ヤマトの青年達の成長譚といったおもむきもありますが、ガッチャマン以下科学忍者隊の青年達は、果てしなくくりだされる敵新鋭メカとの、徒労に似た戦いの中で、確実に精神のある部分をすりへらし、すさみ、疲労の陰（かげ）をこくしていきます。

このガッチャマンの世界について述べるためには、かつて多くのファンに深い感銘（ショック）を与えた、コンドルのジョーの死のエピソードをはぶくことはできません。なぜならアニメの歴史の中で、このコンドルのジョーほど念入りに殺されたキャラクターは、なかったのですから。

トルーキン流にいうなら、ここにおいて、世界はもっとも暗くなったのですから。

全部、御覧になってない方の為に、説明いたしますと、何と放送回数にして、七回もかかって殺しているのです。

一回一回、まるでそのコンドルの羽根を、むしるように次々に、退路が絶たれ、一寸刻み五分試しといった感じで、痛めつけられます。まったく、タツノコプロには、正真正銘のサディストが、いるに違いありません。ジョーはまず、めまいと頭痛になやまされ何度か、任務をしくじります。そして敵ギャラクターに彼一人だけ素姓をあばかれ、病であと数日しか生きられない体と知らされます。その上科学忍者隊のメンバーからもはずされ、単身のりこんだ敵本処地の戦いの中で、変身装置をこわされ、マシンガンで撃たれ、劇薬をのまされ、はずかしめられ、仲間からおきざりにされ、一人死んでいきます。

アニメの中で、主人公ないしは、重要な副主人公が死んでいくことはないことではありませんが、それは例えば、爆弾をもって体当りして玉砕するとか、もっと効果的ではなばなしいものです。

それに対して、このジョーの死は、犬死にも近いほどぶざまで、悲惨です。

特に、その死以上に痛ましさを、おぼえる件りは、ブレスレットを撃たれて、バードスタイルを失ってしまうところです。

もう二度と彼は、スーパーマンにはなれません。寒風にふきさらされる。生身の弱い人間として、生き死ぬよりないのです。

タツノコのスタッフが、なぜこうまでしつこく一人の少年を、追いつめ殺していったか、私は、ここに「ガッチャマン」の世界の秘密が隠されているのだと思います。

ジョーの死のエピソードは、地球滅亡の危機と、同時進行で語られます。

ギャラクターの主領ベルクカッツエの意図をも越えて、総裁Xのつくった装置は一途に地球を、滅亡にみちびくために、マグマに向って降下していきます。

そして、それには制御装置がついていないのです。丁度、我々の文明のように、ガッチャマン以下科学忍者隊は、それを阻止するために、奮戦します。私はここにも、タツノコプロの人々の、はなはだ周到な用意を感じます。この時点で、ジョー以外の他の忍者隊には、前と何の変化もないのです。

素姓もばれていませんし、相変らずバードスタイルで、思いっきりあばれることが出来るのです。しかし、そのスーパーマンの彼らには、地球の滅亡を止めることが出来なかったのです。

地球を救ったのは、ジョーのとばしたたった一本の羽根手裏剣。何もかも失ってしまったジョー、命も希望も戦う力も、誇りもすべて失ってしまった彼だからこそ、地球を救うことができるのです。虐げられ、すべての人間的尊厳をもはぎとられたものが、その命の想いをこめてなげた羽根手裏剣それが、地球の滅亡をくいとめたのです。

しかし、ナレーションは、非情につづけます。「そのことを知るものは誰もいなかった」と。

仲間のガッチャマン達も、総裁Xの宇宙脱出の熱光線の中で、多分一瞬のうちに骨も身も、とかされてしまった当のジョー自身も。それは、何と暗いやりきれない結末でしょうか。

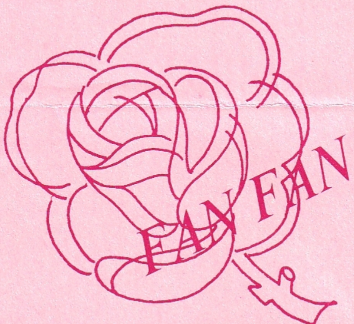
「ガッチャマン」の世界では、とうとう最後まで、だれも真実をはっきり見とおすことが、出来ないのです。

そして、現在我々の住む世界は、ヤマトの世界よりもガッチャマンのそれに似ています。我々は、はっきりした使命感をもつことも出来ず、情念の中をひきまわされ、何かにむかっていらだち、不条理の混沌の中にいます。

たしかに、「ガッチャマン」の世界は暗い。

それでも、私はその暗さの中で、白い羽根が燐光のように光っているのをみます。

歯車の中で、きしみ、必死にあらがっていた、あの一本の白い羽根こそが、「ガッチャマン」の世界からの、メッセージなのだと私には、そう思えるのです。



これまで当社で制作した作品を皆さんの手で楽しんでいただこうと、今年の春からフィルムリースを行っています。ほとんどの作品をお貸しすることができますが、リース用としては1作品2本までとなっておりますので、先に申し込んだ人からお貸ししております。料金は、カラー作品が一本一回上映につき15,000円(一般)、モノクロが12,000円です。＊ファンクラブ会員には、特別割り引を致します。なお地方に発送する場合は、申し込み者の最寄の駅止めで発送いたします。この場合料金は着払いになりますのでよろしくお願いいたします。予約は電話でも結構ですが、最終決定はお送りする申請書がこちらに届いた時点になります。

自主上映会

▶9月2日、広島市青少年センター上映作品＝ポリマー／キャシャーン、連絡先＝広島市江波南2－3－6 浜田賀代子

▶9月30日～10月2日、青山学院高等部AV教室、作品＝ガッチャマン、連絡先＝世田谷区新町2－22－9 猪野宏子

▶9月30日、東大和高校、作品＝キャシャーン

▶10月1日、聖ヨゼフ学園、学園祭作品＝ガッチャマン

▶10月7日、8日、東邦大学付属高校(習志野)作品＝ガッチャマン／キャシャーン

▶10月8日、財団全国労音会館、作品＝ガッチャマン／ポリマー／ゴーダム／ポールのミラクル大作戦／決断／マッハGOGOGO、連絡先＝千葉県八千代市勝田台3－12－1 石田和子

宇都宮・二荒山神社

▶10月15日、京華学園体育館、作品＝ガッチャマン

▶11月3日、4日、独協医科大学(栃木県)作品＝ガッチャマン

▶11月4日、北海道大学、作品＝宇宙エース／ガッチャマン／ポリマー／オープニング集

▶11月5日、川崎高津高校、作品＝ガッチャマン

メモ・ランダム

▶ここで、コマーシャルを。ガッチャマンの総監督であった鳥海永行氏が、劇場版制作にともない、ガッチャマンを小説化しました。この本は映画では語れなかった部分に力を入れたということです。是非、一読をおすすめ致します。(朝日ソノラマ刊)

▶ガッチャマンIIの主題歌の吹込みが、おわりました。歌手は、佐々木功と堀江美都子のデュエット。もう一曲は、水木一郎です。

新形式の主題歌です。たのしみにしていて下さい。

TATSUNOKO FAN CLUB NEWS SEP. 20, 1978／VOL.1. NO.1 Published TATSUNOKO FAN CLUB.,
〒185 22-12 3-CHOME, MINAMI-CHO KOKUBUNJI-CITY TOKYO, JAPAN.
AYAKO YOSHIDA publisher / AKIRA INOUE editor / MACHIKO YAMAMOTO asistant editor/ HIDEKI SUGISAWA art director.
©1978. TATSUNOKO

編集後記

▶８月20日、朝日新聞社グランドで、宿敵朝日ソノラマ編集部と野球の試合をやりました。我々の健闘むなしく負けました。ソノラマとはこれで二勝一負の成績です。

▶８月21日宇都宮アニメフェスティバルの後、笹川ひろしは二荒山神社境内で、宇都宮のファン30名余りと、ガッチャマンパートIIについて、話し合いの会をもちました。総裁Xは、今度は消しゴム形になって、地球に戻って来るのだ！などといっていましたが……。本当？ひろしちゃん。

▶９月３日、吉田竜夫の一周忌の法事が行なわれました。私達にとっても、未まだに信じられません。